

Anyのわかりやすい認知的意味記述

田 中 実*

Simple Cognitive Account of Any

Minoru TANAKA

要 旨

田中(2010)に基づき, anyの認知的コア意味を「任意のどれでも」とし, その意味展開を{任意のどれでも⇒周辺も含んで⇒結果としてすべて}と提示した。ここでのポイントは, その意味説明の平易さ, 直感的に理解できること, そしてその意味展開である。それを, 文法的文脈(疑問, 条件, 否定, 肯定)を考慮に入れて二つのタイプの図示を行った。一つは表形式, もう一つは「『任意』→『周辺強調』」という認知的プロセスを具現するような円を使った図である。このようなわかりやすくしかも適切なanyの意味表記を追求する中で, そのanyの意味内容がさらに精緻なものにされた。例えば, anyの肯定用法にも「周辺の意味」が強調されない場合があること, anyの肯定用法にある「種々の意味」は, 結局はanyのコアのバリエーションにしかすぎず, その中のいささか特殊な表現に表れるため目を引く用例になっているということなどである。結論として, 本論文で示した二つの図とそれに説明, 具体例を付け加えることで, anyの意味が直感的に納得理解されるものになると考えられる。

キーワード: コア, 任意, 周辺, 認知的意味, 意味展開

1. 本研究の目的

Anyの認知意味論的な考察, 検討をこれまで田中(2007), Tanaka(2008), 田中(2009), 田中(2010)と重ねてきた。とりわけ田中(2010)では, anyのコアの意味として, その全体像, その意味展開を(比較的)わかりやすく捉えることができた。

*准教授 英語学・英語教育

今回の研究は田中 (2010) の any の認知的意味の捉え方という点では基本的に変わりはない。だが、そのわかりやすい記述という点では検討を加え、その過程の中で田中 (2010) の研究をより精緻なものにすることが目的である。

2. 本研究の背景

本研究は田中 (2010) を基に研究したものであり、それはまた田中 (2007), Tanaka (2008), 田中 (2009) という一連の研究の中で生まれてきた。そこでここでは、上記4つの研究の概観をしておく。ただし、こういう経緯があるので、田中 (2007), Tanaka (2008), 田中 (2009) は簡潔に概観しておく。なお、この3つの論文の概要は、田中 (2010) において詳しくまとめられている。

『Any の意味記述の困難さ』(田中, 2007)

Any の意味記述に関して辞書及びこれまでの学術研究を調査した。Any の意味記述の比較検討の中で明らかになってきたのは、その意味を明解に捉えることの難しさであった。前回の論文 (田中, 2010), そして特に本論文では any の意味の記述は簡単に見える。だが、通常の any の記述、論文はわかりにくく、またその語の直感的な理解を得ることは困難である。その他には、疑問と条件の any の類似性を指摘してある。

“Reconsideration of Some and Any” (Tanaka, 2008)

Any は some の非肯定版ではないことを示した。数量の問題でも、数量以外の意味の問題でも、any は some の非肯定版ということはできない。そこには、any の複雑な行動 (使われ方)、意味が見て取れる。

『Any の意味：英英辞書から any の意味を探る』(田中, 2009)

情報量は少ないが、母語話者の直感を反映していると思われる英英辞書を精査した。明らかになった点としては、「any の意味特徴を示す重要なキー・フレーズ：no matter which/what, how much or how little, how many or what, regardless of quantity or number, in whatever quantity or number, the smallest quantity or number of」, 「肯定と条件、肯定と否定それぞれの間での any の意味の類似性」, 「弱い any, 強い any」, 「弱い any と不定冠詞・ゼロ冠詞の違い」, 「肯定文の any の種々の意味」, 「『Any N+ 関係詞節』の意味」などがある。

『Anyのコアの意味』（田中，2010）

まず any が「コアの意味（文脈に依存しない一つの中核的な意味（田中茂範 1990）」を持つと考える根拠として次の4つを挙げた。

- ・ Any が単に数量の問題ではない（これまでも述べてきた）それ独自の認知的意味を持つと考えられること。
 - ・ 肯定，疑問，条件，否定のすべての組み合わせで検討したわけではないが，{疑問と条件} {肯定と条件} {肯定と否定} の各組み合わせで any の意味の類似性をみることができた。そこから他の組み合わせにおける類似性も推察することができる。
 - ・ 肯定文における any の種々の意味の共通性。
 - ・ 田中（2009）の『『弱い意味の any』と『強い意味の any』』の提案とそれに基づく考察から肯定，疑問・条件，否定すべてにわたる any の意味に共通項が推察されること。
- 以上の根拠を基に any のコアの意味仮説を次のように提唱する。

任意のどれでも ⇒ 周辺も含んで ⇒ all, every というプロセス

「任意のどれでも」とは，any はそれが修飾する名詞の任意の個々のメンバーを指す。どのメンバーかという指定，特定は無い（non-selective）。また，あくまで個々のメンバーを指すのであって，全体を指すことは無い（+individuality, -totality）。「周辺」とは，any が修飾する名詞の指すカテゴリーのメンバー性が周辺的なものを言う。Any は任意のメンバーを指すので周辺のメンバーもその任意の中に入るわけであるが，周辺のメンバーに焦点が行く。

あるカテゴリーについて，その周辺のメンバーに当てはまるのであれば，中心的メンバーは当然のこと，「すべて」のメンバーに当てはまることになる。ただ，上記で「プロセス」という用語を使っているように，いきなり any が「すべて」という意味になるわけではない。上記の段階（プロセス）を踏んでその結果として「すべて」という意味になる。そうした段階を踏むので，「すべて」という意味になった場合でも本来の「任意のどれでも」という意味が常に基本の意味として背景に残る。

この any の意味記述の重要な特徴は，そのコアの意味「任意」「任意のどれでも」さらにその基本的な意味展開『『周辺も含んで』 → 『すべて（all, every）』』はどちらも平易なものであるということある。それは any の本来の意味に対する直感を反映していると考えられる。

Any の意味の特徴は，「任意」，「周辺性」であると思われるが，そのコアは「任意」と考えられる。多くの場合，むしろ「周辺性」の意味が感じられるように思われる。だが，そうでな

い場合もある。田中（2009）で考察したように、「弱い意味 any」はそのような「周辺」の意味は感じられない。そして「周辺性」が感じられない場合には「任意」の意味がある。しかも「周辺の」意味には任意の意味を見て取ることができる。また、all, every に近い意味になる場合は「周辺性」の意味から来ている。つまり、そこにも「任意」の意味がある。

提唱した any のコア意味仮説から any のさまざまな意味を次のように説明した。

肯定の any

「Any N+ 関係詞節」のタイプでないもの

- (A) どちらかというとも every, all に近いもの、結果として every, all と言えるもの
- (A') どんな悪いものでも、どんな良いものでも
- (B) (明示的に) all, every の意味にならない場合
- (C) その他（「任意→周辺」の雑多な例と思われる）

「Any N+ 関係詞節」のタイプ

- (D) 文脈から結果として every, all になる場合
- (E) (明示的に) all, every の意味にならない場合
- (F) できる限りの (as much as possible, as many as possible)

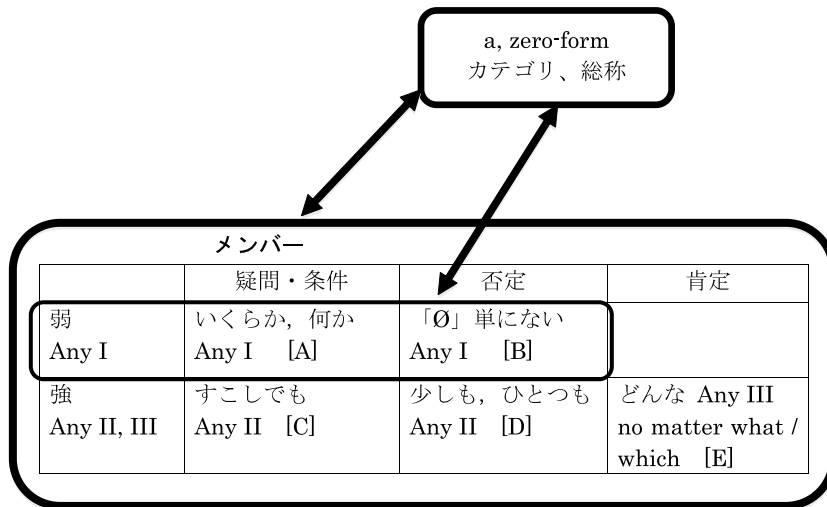


図1 「弱い、強い Any」, 「Any I, II, III」及び「冠詞 a, ゼロ冠詞」の関係

非肯定文（疑問、否定、条件等）における any

上記図で、Any I, II, III とは Sahlin (1979) の分類を指すが、ここではそれ以上は触れない。「弱い Any」は、単純に「任意」の意味を示し、「周辺性」を表す意味はない。そのうち疑問・条件での場合を [A]、否定での場合を [B] とした。[A] は、単純に任意のものを取り上げる。[B] は、単純にないという意味だが、任意のメンバーで間接的にその所属するカテゴリーすなわち全体を否定する。「強い Any」[C], [D] は「周辺性」の意味を示す。（肯定の用法 [E] ももちろん「周辺性」の意味が強い。）

なお、上記には「a, zero-form カテゴリー、総称」として枠で囲み any の項の枠と対照させている図が含まれている。これは、田中 (2009) で言及した点であるが、「any + N」を「不定冠詞 a + N」及び「ゼロ冠詞 + N」と対照させている。「any + N」は任意のメンバーを指すのに対し、「不定冠詞 a / ゼロ冠詞 + N」は、任意のメンバーではなくてその名詞が示すカテゴリーを指す（つまり総称）。これは、弱い Any が任意の意味なのでそれと対照させている。だが、any は周辺を示す強い Any も含めて全体が任意の意味を示すので、any 全体とも対照させている。ここで用いられた図には <any sort of> の表記も入っていたが、この概観では省いた。そこでは <any sort of> については触れていなかったからである。

3. Anyのわかりやすい認知的意味記述

まず、田中 (2010) に基づき、の any のコア的意味を「任意のどれでも」とする。なお、コア的意味とは文脈に依存しない一つの中核的な意味（田中茂範 1990）と定義する。その上で、any のコア的意味とその意味展開を次のように提示する。

Any

コア意味： 「任意のどれでも」

意味展開：

{(i) 任意のどれでも ⇒ (ii) 周辺も含んで ⇒ (iii) 結果としてすべて} というプロセス

ここでのポイント：

(1) 「Any のコア的意味」の平易さ。

日常語である any の意味の平易さを反映したものである必要がある。また、直感的な理解ができるものであること。

- (2) 「プロセス」の意味：(iii)の意味は直接得られる、あるいは独立して存在する意味ではなくて、(ii) という過程を経て間接的に得られる意味である。
- (3) Anyのコアの意味を「任意」とする理由：(i)の場合に限らず、(ii), (iii)の場合にも、「任意」の意味が基本にあり、背景に存在する。
- (4) Anyの意味の任意性は、「不定冠詞 a, ゼロ冠詞」との対照からも認識される。
 「Any+N」はカテゴリ Nの任意のメンバーを指すのに対し、「定冠詞 a / ゼロ冠詞 + N」はカテゴリそのもの（すなわち総称用法）を指す。

Anyの意味は、文法的文脈すなわち肯定、疑問、条件、否定という文脈とそれ以外の通常の文脈により上記の意味展開を持つと考えられる。例えば、ひとつは「肯定」という文法的文脈が「任意」から「周辺的」意味の強調へと導く。もうひとつは、文法以外の文脈が周辺的意味の強調へと導く場合である。このような周辺的意味への意味展開をわかりやすく図で表すと以下ようになる（なお、この図は田中（2009）、田中（2010）で示した図をさらに改良したものである）。

「強い any」とは、any Nの Nが指し示すカテゴリの周辺的なメンバーが強調される場合を言う。それに対し「弱い any」とは、そのようなメンバー性を含意せず、単純に任意のメンバーを指す場合のことを言う。単純な「任意」から「周辺的」意味強調の過程は連続的である。したがって、その境は破線で表現した。「周辺」はあくまで周辺的意味の強調であるので、そ

		非肯定		肯定
		疑問・条件	否定	
任意	任意 [弱い any]	いづらか、何か	単にない	(どれでも)
	周辺的 [強い any] no matter what or which, whatever quantity	少しでも	少しも、ひとつも	どんな (一でも)

図2 任意から周辺メンバー強調と文脈（肯定・非肯定、通常の周辺強調）の関係

のベースには「任意」の意味がある。したがって、左端の欄に両者が任意であることを示した。

“No matter what or which, whatever quantity”がanyの意味の強弱を分けるひとつの大きな基準となっている。なお、この図で“no matter what or which, whatever quantity”という英語表現を使用したのは、英英辞書にのみはっきりと見いだされたanyの特徴的な意味だったからである(田中, 2009)。あえて日本語で表現すれば、「どのようなものであっても、どのような数量であって」となるであろう。前者は(性)質・種類、後者は言葉通り数量についてである。

非肯定では、(文法的以外の)文脈により“no matter what or which, whatever quantity”の意味があるかないかでいずれの場合(弱い, 強いany)もあるが、肯定文の場合は文脈によらず通常強いanyの意味と思われる。ただし、図2の中でも示したように、肯定でも周辺の意味があまり感じられず、どちらかというとなりの意味が中心のような例もある。

Any bus that stops here goes to the station. ここに止まるバスはどれも駅まで行きます
(ニューブロード英和辞典)

肯定での使用だからといって必ず「周辺」の意味になるわけではないのである。次の例も同様で、任意性が強調されるだけで、周辺の意味があるかどうかははっきりしない。

You can take any box on the table. テーブルの上のどの箱を取ってもいい (Eゲイト英和辞典)

You can read any book you like. 好きな本ならどれでも(1冊)読んでよい (レキシス英和辞典)

Anyの修飾する名詞が可算名詞の場合、それが単数であるのか複数であるのかもanyの意味が単純な任意であるのか周辺の意味の強調になっているのかに影響する。名詞の単・複数形という点では文法的文脈だが、単数の内容なのか複数の内容なのかは意味的でもある。「Any + 単数名詞」であれば周辺の意味が強調されやすい、一方「any + 複数名詞」であれば、複数ゆえに焦点がぼけて周辺の意味は想起されにくい、そして個々の任意メンバーに均等に注意が向けられやすい。ただし、「any + 物質名詞/抽象名詞」では、単複の区別がないので単複という形に基づく意味の区別はできない。任意なのか周辺強調なのかは、前後の文脈から意味的に考えるほかはない。なお、物質名詞/抽象名詞の周辺性が強調される場合は、個々のメンバーはないので性質、種類、量(数ではなくて)ということになるであろう。なお、この可算名

詞の単数というの any の意味に影響を与えるひとつの要素にしすぎない。上記の例（‘any box,’ ‘any book’）でもわかるように単数だが必ずしも周辺メンバーを強調するわけではない。

上記の図をもう少し立体的に表してみる。

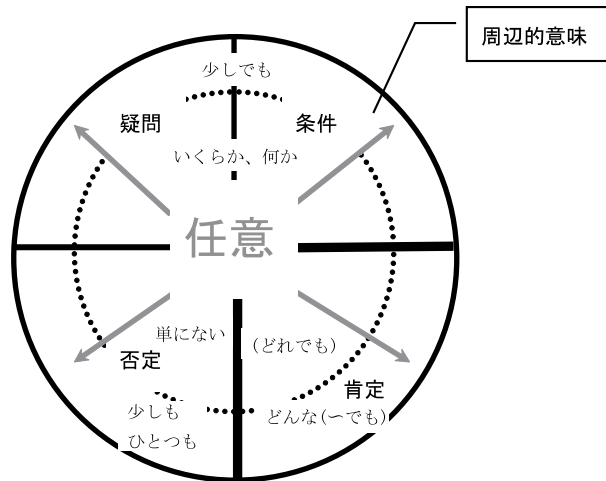


図3 任意から周辺メンバーへの展開と文法的文脈（肯定・非肯定，通常の周辺強調）

この図では、any の意味を二重円を使って表現した。「任意」の意味がコア（中核）なので中心に置き、その意味が広がり展開していくプロセスを中心から外へ向かう矢印で表現した。周辺の意味は二重円の外側で表した。単純な「任意」だけの意味と「周辺」が強調された意味との間は連続的なものであるため、その境界を示す内側の円は点線で示した。疑問、条件、否定には単純な「任意」だけを指す場合（弱い any）、「周辺的」な意味を示す場合（強い any）の両方があるので、その両者にまたがるところにそれぞれに表記（疑問、条件、否定）を配置した。一方、肯定は通常「周辺的」な意味だけを指すので周辺を表す領域を表すところにその用語を配置した。また、肯定と非肯定（疑問、条件、否定）との境界線は非肯定内での疑問、条件、否定の間で境界線よりも太くした。

上記の二つの図2, 3で any の意味を簡潔にまとめたが、田中（2009）、田中（2010）で示したように肯定の any には種々の意味があった。それをまとめると次のようになる。

「Any N+ 関係詞節」のタイプでないもの

(A) どちらかという every, all に近いもの、結果として every, all と言えるもの

- (A') どんな悪いものでも, どんな良いものでも
- (B) (明示的に) all, every の意味にならない場合
- (C) その他 (「任意→周辺」の雑多な例と思われる)

「Any N+ 関係詞節」のタイプ

- (D) 文脈から結果として every, all になる場合
- (E) (明示的に) all, every の意味にならない場合
- (F) できる限りの (as much as possible, as many as possible)

(A), (A'), (B) と (D), (E) は重なり合うので, 「Any N+ 関係詞節」に特殊なのは, (F) の意味だけである。したがって, この肯定の any の種々の意味は, さらに次のようにまとめられる。

肯定の any の種々の意味 (改訂版)

- (A) どちらかという to every, all に近いもの, 結果として every, all と言えるもの (どんな (周辺のメンバー的な) ~でも)
- (A') どんな悪いものでも, どんな良いものでも
- (B) (明示的に) all, every の意味にならない場合
- (C) その他 (「任意→周辺」の雑多な例と思われる)
- (D) 「Any N+ 関係詞節」というパターンを取って, 「できる限りの (as much as possible, as many as possible)」(注として, 「any N」に続く関係詞節の中の動詞 like, (can) get, そして「any N」を目的語にとる動詞 take, need などが来る。)

上記では肯定の any の「種々の意味」として考察したわけであるが, ところが実際はそれらはすべて「任意」, 「任意→周辺」というプロセスで説明されるように思われる。このコアの認知的意味から上記「肯定の any の種々の意味 (改訂版)」は次のように再解釈され, 説明される。

- (A) 周辺メンバーへの言及, その強調が, どちらかという to 「すべて (every, all)」に近いもの, 結果として「すべて」と言えるものとなる。
- (A') 「どんな (周辺のメンバー的な) ~でも」が周辺メンバーを示す意味からはっきりと最悪 (最良) メンバーを示す場合に「どんな悪いものでも, どんな良いものでも」となる。

- (B) 明示的に *all, every* の意味にならない場合としているのは、*any* の任意性が強調されたケースで、「どれでも」となるが、文脈からそれが「すべて (*every, all*)」を暗示しない場合である。「すべて」となるのは、文脈、語用論的 (*pragmatic reasons*) によるということであろう。これに当てはまる例としては、*You can take any box on the table.* 「テーブルの上のどの箱を取ってもいい」(E ゲイト英和辞典)、*You can read any book you like.* 「好きな本ならどれでも (1冊) 読んでよい」(レキシス英和辞典) などがある。
- (C), (D) は、*any* の「任意→周辺」の意味展開に基づく雑多な用法と考えることができる。

まず、肯定の *any* がある特殊な構文に表れる場合である。次の例では、「(他の) どの～と (比べて) も」という意味になるが、これは使われている構文の特殊性が関わっているためであり、*any* そのものの意味に変化はない。

Eri is taller than any other student in her class.

次の *Before* ～の例でも、「任意」から「周辺」への意味を表していると考えられる。結果として「すべて」ということになるが、*all* には置き換えられない。*Any* は個々のケースについて述べている。*Any* が「すべての」の意味になるのは文脈の問題で、結果としてそうなるということがよくわかる。*Any* は結果として「すべての」という意味になる場合でもそうでなくても、同じ「任意→周辺」の意味を保持している。

Before you buy any TV set, try out the remote. (ウィズダム英和辞典 第2版)

「*Any N+* 関係詞節」というパターンをとって「できる限りの」という意味を表す場合もやはり肯定の *any* が特殊な構文に表れる場合として解釈してよいと思われる。ただし、すでに述べたように単にその構文だけでなく、それ以外に「*any N*」に続く関係詞節の中の動詞 *like, (can) get*, そして「*any N*」を目的語にとる動詞 *take, need* などが大きく影響している。

Take any amount you like. いくらでも好きなだけ (ニュープロシード英和辞典)

「好きなどんな量でも (周辺)」→ 多い方の周辺の方に導かれる

次の3つは、「得られるだけの」、「手に入るだけの」、「できる限り多くの (as much as possible)」ということで「限界」までのことを示しており、やはり「周辺」を指している。

I will accept *any* help (that) I can get. 得られるだけの援助はすべて受け入れるだろう (E
ゲイト英和辞典)

He will accept *any* money he can get. 彼は手に入るだけの金は受取るだろう (ジーニアス
英和辞典 改訂版)²

They're going to need *any* help they can get. (LDCE 4th: as much as possible)

次に挙げる例はややイディオマチックな用法と思われる。

has *any amount of* money (any = a very large) (COD 8th)

You are entitled to *any number of* admissions. 何回でも入場できる (リーダーズ英和辞典
第2版)

Any minute/day/moment/time now (=Very soon) there's going to be a massive quarrel
between those two. (CIDE)

これらにおいては、anyの修飾する名詞に特殊性があり、数量、時間を表す名詞に使われる、またその使われ方にも特殊性がある場合である。だが、もちろん「任意→周辺」で「どんな～(でも)」という意味であり、anyの基本的意味は変わらない。

次の例は、修飾される名詞は数量、時間だが、イディオマチックな意味ではなく単に「任意、周辺」と見てよい。ふつうの用法である。つまり、anyの修飾する名詞の問題というだけではない、使用のされ方、文脈も大いに関係する。

You can enter any *number* from 0 to 100. 0から100までのどんな数値も入力することができます (ウィズダム英和辞典 第2版)

You may come (at) *any time*. いつ来てもよいですよ (ウィズダム英和辞典 第2版)

上記改訂版の(A), (A'), (B)では「any N」が「すべて (every, all)」に近い意味になるかどうかを基準に意味分類を考えている。だが、それは結果として「すべて」に近かったり、そ

うでなかったりするだけである。本論では、数量は any の意味にとって重要な要素ではないと考えているので³、ここで分類項目として明示的に取り上げる意味がない。さらに、(C) の括弧付きで記したが、「任意→周辺」がまさに示しているように、(C) は数量、「すべて」とは別のさまざまな『『任意→周辺』の雑多な例』である。このように考えると、(D) の「Any N+ 関係詞節」も (C) の『『任意→周辺』の雑多な例』の一つと考えられるのがわかる。ただ、特殊な構文パターンをとっているので目立つということなのである。したがって、結局のところ、肯定の any の「種々の意味」も上記の二つの図 2, 3 で示した肯定の箇所の強い周辺の意味の any, すなわち『どんな（周辺のメンバー的な）～でも』という意味に尽きるということになる。

4. 結び

田中（2010）で提唱した「any のコア的意味」をよりわかりやすく提示し、重要なポイントをまとめた。「any のコア的意味」を表す図に改良を加え、わかりやすくしかもより適切なものにした（図 2）。また、『『任意』→『周辺強調』』という認知的プロセスを具現するような円を使った新たな図（図 3）も試みた。

このように「any のコア的意味」をよりわかりやすくかつより適切なものにする際、再考を加えた。この再考は、「any のコア的意味（『任意』→『周辺強調』）」の記述をより精緻なものにした。そのことによって、「any のコア的意味」の提案をより説得性のあるものとしたと考える。

図 2, 図 3 は表現の仕方は違っているが、「any のコア的意味」はこの二つの図が示すものに尽きるものと思われる。それに説明、具体例が付け加えることで、any の意味が直感的にそして「なるほど」と思われるように理解されると思う。

注

- 1 弱い、強い any が表れるのは、メンバー（性）が等質ではないからである（Rosch (1975) 参照）。それに文脈の影響が加わる、つまり語用論的な理由（pragmatic reasons）のためにこのような弱い、強い any の意味が引き起こされる。
- 2 「ジーニアス英和辞典 改訂版」には、語法として「この意味では法助動詞を用いた文が多く、具体的に何かをした文脈では any は不可」とある。次の例を挙げている：× He ate any cake(s) on the table. He ate all the cakes [every cake] on the table. (彼はテーブルのケーキをみんな食べてしまった)

- 3 田中 (2010) でも指摘したが、例えば COD 8th に* “whichever is chosen” の意味として “any fool knows …” という例が挙げられている。これは、any が数量を示すのがその意味ではないことをうまく示している。Any fool (どんな馬鹿でも) とは「all fools (馬鹿はみんな)」という意味ではない。数量が問題なのではない。Any fool は (人の) 周辺メンバーの強調に使われているのである。したがってそこから間接的に「誰でも、みんな」という意味が生まれてくる。

引用辞書

- 『E ゲイト英和辞典』, ベネッセ・コーポレーション, 2003.
『ウィズダム英和辞典 第2版』, 三省堂, 2007.
『ジーニアス英和辞典 改訂版』, 大修館, 1993.
『ニュープロシード英和辞典』, ベネッセ・コーポレーション, 1994.
『リーダーズ英和辞典 第2版』, 研究社, 1999
『レキシス英和辞典』, 旺文社, 2003.
Cambridge International Dictionary of English, Cambridge University Press (CIDE) 1995.
The Concise Oxford Dictionary of Current English, Eighth Edition, Oxford University Press, 1990.
Longman Dictionary of Contemporary English, 4th Ed. Pearson Education Limited, 2003

参考文献

- 田中茂範, 『認知意味論: 英語動詞の多義の構造』, 三友社, 1990.
田中 実, 「Any の意味記述の困難さ」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第18巻第3号, 2007, pp.13-35.
田中 実, 「Any の意味—英英辞書から any の意味を探る—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第20巻第2号, 2009, pp.139-169.
田中 実, 「Any のコアの意味」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第21巻第2号, 2010, pp.147-168.
Rosch, Eleanor. ‘Cognitive representations of semantic categories.’ *Journal of Experimental Psychology: General* 104, 1975, pp.192-223.
Sahlin, Elisabeth. *Some and Any in Spoken and Written English*, Uppsala, Almqvist & Wiksell International, 1979.
Tanaka, Minoru, “Reconsideration of some and any”, *The Journal of Kawamura Gakuen Woman’s University*, Vol.19, No.2, 2008, pp.83-95.